

竜潭譚

泉鏡花

青空文庫

躑躅か丘

日は午なり。あらら木のたたら坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、ただ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一点の雲もなく、風あたたかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり来れり。眉太く、眼の細きが、向ぎまに願巻したる、額のあたり汗になりて、のしのしと近づきつつ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ危ないぞ。」

といひずてに眈に皺を寄せてさつさつと行過ぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩躑躅の花にかくれて、髪結ひたる天窗のみ、や

がて山蔭やまかげに見えずなりぬ。草がくれの径遠くこみち、小川流るる谷間たにあいの畦道あぜみちを、菅笠冠すががさかむりたる婦人おんなの、跣足はだしにて鋤すきをば肩にし、小さき女むすめの児この手をひきて彼方あなたにゆく背姿うしろすがたありしが、それも杉の樹立こたちに入りたり。

行く方ゆかたも躑躅かたなり。来し方こかたも躑躅かたなり。山土やまつちのいろもあかく見えたる。あまりうつくしきに恐しくなりて、家路に帰らむと思ふ時、わがあたる一ひと株かぶの躑躅かたのなかより、羽音はおとたかく、虫のつと立ちて頬かすを掠めしが、かなたに飛びて、およそ五、六尺隔へだてたる処ところに礫がたのありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかかれればつとまた立ちあがりて、おなじ距離五、六尺ばかりのところにとまりたり。そのまま小石を拾ひあげて狙ねらひうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまはりて、また旧もとのやうにぞをる。追ひかくれば迅はやくもまた遁にげぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラキラとささやかなる羽はばたきして、鷹揚おうようにその二ふたすぢの細き髻ひげを上うへした下えしたにわづくりておし動かすぞいと憎にくさげなりける。

われは足踏あしづみして心こころいらてり。そのゐたるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呟つぶやきざま、躍おどりかかりてハタと打ちし、拳こぶしはいたづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと思ふ心を籠めて瞻りたれば、虫は動かずなりたり。つくづく見れば羽蟻の形して、それよりもやや大なる、身はただ五彩の色を帯びて青みがちにかがやきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光沢ある虫は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出でたれば、打置きてすぐごと引返せしが、足許にさきの石の二ツに碎けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒虫をねらひたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくぐりて小砂利をさそひ、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。

袂のちり打はらひて空を仰げば、日脚や斜になりぬ。ほかほかとかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒きこと限りなかりき。

心着けば旧来し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけぬたり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果しなきに、両側つづきの躑躅の花、遠き方は前後を塞ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの真蒼き下に、彳むはわれのみなり。

鎮守の社
ちんじゆやしろ

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽ればまたあらたに顯る。起伏あたかも大波の如く打続き、いつ坦ならむとも見えざりき。

あまり倦みたれば、一ツおりてのぼる坂の窪に踞ひし、手のあきたるまま何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出来たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直なるもの、心の趣くままに落書したり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻に毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思ふに、俄にその顔の見たうぞなりたる。

立ちあがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透かすで躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりまさりたるに、手を見れば掌に照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯見ればおなじ躑躅のだからおりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでかかくてあらむ、こたびこそと思ふに違ひて、道はまた蜿れる坂なり。踏

心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得堪へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きてあつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある処に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あぎやかにぱつと茜さして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遙に滝の音聞えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴えたる声の幽に、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ図なることを認め得たる、一声くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうやう心たしかにその声したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰おろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ひたる

紅くれなの雪のなかをばのがれつ。背後うしろには躑躅つづじの花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株ひとかぶも花のあかきはなくて、たそがれの色、境内けいだいの手洗水みたらしのあたりを籠こめたり。柵さく結ゆひたる井戸ひとつ、銀杏いちようの古りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀どべいあり。こなたは裏木戸のあき地にて、むかひに小さき稲荷いなりの堂あり。石の鳥居とりいあり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌はめたるさへ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとへにゆふ日照りそひたるつつじの花の、わが丈たけよりも高き処ところ、前後左右を咲埋さきうづめたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅くれなと、紫と、青白せいはいくの光を羽色はいろに帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、画えの如く小さき胸にゑがかれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救すくいを姉にもとめしを、渠かれに認められしぞ幸なる。いふことを肯きかで一人いで来きしを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優やさしき人のなつかしけれど、顔をあはせていひまけむは口惜くちおしきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもはず。ひとり境内に
 々みしに、わツといふ声、笑ふ声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツ
 より八ツまでなる児の五、六人前後に走り出でたり、こはかくれ遊びの一人が見いだ
 されたるものぞとよ。二人三人走り来て、わが其処に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、
 「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住む
 は、かたるといふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。児どもが親たちの家富みたるも好
 き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線弾きて折々わが門に来るもの、溝川に
 鱒を捕ふるもの、附木、草履など鬻ぎに来るものだちは、皆この児どもが母なり、父なり、
 祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。さるに町方の者と
 しいへば、かたるなる児ども尊び敬ひて、頃刻もともに遊ばんことを希ふや、親しく、
 優しく勉めてすなれど、不断はこなたより遠ざかりしが、その時は先にあまり淋しくて、
 友欲しき念の堪へがたかりしその心のまだ失せざると、恐しかりしあとの楽しきとに、わ
 れは拒まずして頷きぬ。

児どもはさざめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすもの
 を定めしに、われその任にあたりたり。面を蔽へといふままにしつ。ひツそとなりて、堂

の裏崖をさかさに落つる滝の音どうどうと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ。」

と呼ぶ声、餌に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ来れり。大なる樹のすくすくとならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方と思ふ処には誰もをらず。ここかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また旧の境内の中央に立ちて、もの淋しく噴しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、闐としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき児どもなれば、かかる機会を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまま密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをとふと思ひうかぶに、うちすてて踵をかへしつ。さるにても万一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくことを得ざるべし、それもまたはかりがたしと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、何処より来りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃いたる土のひろびろと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍にゐて、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、その手を懐にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる児のありかを教ふるときとりたれば、いそいと従ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ処に違はず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あたりに小さき稲荷の社あり。青き旗、白き旗、二、三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾なる雑樹斜めに生ひて、社の上を蔽ひたる、その下のをぐらき処、孔の如き空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたたるばかり斜にわが顔を見て動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。さればいささかもためらはで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉堆く水くさき土のほひしたるのみ、人の氣勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またたくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。何方にか

去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず啊呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきものゝ
て人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然として眼を睜りぬ。足ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみ
たる、左手に坂あり。穴の如く、その底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々たる坂下よ
り、もののぼるやうなれば、ここにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮もなさ
社の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ぎ、呼吸をころしてひそみたるに、四足のもの
の歩むけはひして、社の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女の
うつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず。ここをわれに教へしを、今にして思へばかくれ
たる児どものありかにあらで、何らか恐しきもののわれを捕へむとするを、ここに潜め、
助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提
灯の火影あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひ
そみたる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて来りし感あり。

あたかもその立留りし折から、別なる蹙音、また坂をのぼりてさきのもと落合ひたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の声に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」

「それでは。」といひて上下にばらばらと分れて行く。

再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顔少し差出だして、外の方をうかがふに、何ごともあらざりければ、やや落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚なる、と冷かに笑ひしに、思ひがけず、誰ならむたまぎる声して、あわてふためき遁ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

おおぬま
大沼

「ゐないツて私あどうしよう、爺や。」

「根ツからゐさつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れます。何せい、御心配な
こんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結めを丁とたたいてやらつしやれば
好いに。」

「ああ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそつと出て行
つたろうではないかねえ。」

「それはハヤ不念なこんだ。帯の結めさへ叩いときや、何がそれで姉様なり、母様な
りの魂が入るもんだで魔めはどうすることもしえないでござす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語りひつつ、社の前をよこぎりたまへり。

走りいですが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪みたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早やその姿は
見えざりき。

涙ぐみてイむ時、ふと見る銀杏の木のくらき夜の空に、大なる円き影して茂れる下に、

女の^{うしろすがた}後姿ありてわが眼^{まなこ}を遮^{こさ}りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼^よばむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじひにわが此^こ処にあるを知られむは、拙^{つた}きわざなればと思^{おも}ひてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見え^みずなればなほなつかしく、たとへ恐^{おそ}しきものなればとて、かりにもわが優^{やさ}しき姉上の姿に化^けしたる上は、われを捕^{とら}へてむごからむや。さきなるはさもなくて、いま幻^{まぼろし}に見^みえたるがまことその人なりけむもわかざるを、何^{なに}とて言^いはかけざりしと、打^{うち}泣^なきしが、かひもあらず。

あはれさまさまのものの怪^{あや}しきは、すべてわが眼^{まなこ}のいかにかせし作用^{さよう}なるべし、さらずば涙^{なみだ}にくもりしや、術^{すべ}こそありけれ、かなたなる御^み手洗^{たら}にて清^{きよ}めてみばやと寄りぬ。

煤^{すす}けたる行^{あん}燈^{とう}の横^{よこ}長^{なが}きが一つ上^{かみ}にかかりて、ほととぎすの画^えと句^くなど書^かいたり。灯^ひをともしたるに、水^{みづ}はよく澄^すみて、青^{あお}き苔^{こけ}むしたる石^{いし}鉢^{ばち}の底^{そこ}もあきらかなり。手^てに掬^{むす}むとしてうつむく時、思^{おも}ひかけず見^みたるわが顔^{かほ}はそもそもいかなるものぞ。覚^{おぼ}えず叫^{こゑ}びしが心^{こゝろ}を籠^こめて、氣^{いき}を鎮^{しず}めて、両^{ふた}の眼^{まなこ}を拭^{ぬぐ}ひ拭^{ぬぐ}ひ、水^{みづ}に臨^{のぞ}む。

われにもあらでまたとは見るに忍^{しの}びぬを、いかでわれかかるべき、必ず心^{こゝろ}の迷^{まよ}へるならむ、今^{いま}こそ、今^{いま}こそとわななきながら見^み直^{ただ}したる、肩^{かた}をとらへて声^{こゑ}ふるはし、

「お、お、千里^{ちんり}。ええも、お前は。」と姉上ののたまふに、縊^{すが}りつかまくみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ!」

といひて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝^つと馳^はせ去りたまへり。

怪^{あや}しき神のさまぎまのことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いかけぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜^{くちお}しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路^{おおみち}と覚しき町にも出^いでたり、暗^こき径^{みち}も辿^{たど}りたり、野もよこぎりぬ。畦^{あぜ}も越えぬ。あとをも見ずて駈^かけたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く横^{よこ}はりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼^{おおぬま}とも覚しきが、前途^{ゆくて}を塞^{ふさ}ぐと覚ゆる蘆^{あし}の葉の繁^{よこ}きがなかにわが身体^{からだ}倒れたる、あとは知らず。

五位^{ごい}鷲^{さぎ}

眼のふち清すがすが々しく、涼しき薫かおりつよく薫ると心着こころづく、身は柔かき蒲団ふとんの上に臥したり。
 やや枕をもたげて見る、竹縁ちくえんの障子しょうじあけ放はなして、庭つづきに向ひなる山やま懐ふところに、緑
 の草の、ぬれ色青く生茂おいしげりつ。その半腹はんぶくにかかりある巖角いわかどの苔こけのなめらかなるに、
 一いつちよう挺たうはだか蟬せみに灯ひともしたる灯影ほかげすずしく、篋かがいの水むくむくと湧わきて玉たまちるあたりに
 盥たらひを据おゑて、うつくしく髪結かみゆうたる女の、身に一糸もかけで、むかうぎまにひたりてみた
 り。

篋かがいの水はそのたらひに落ちて、溢あふれにあふれて、地の窪くぼみに流るる音しつ。

蟬せみの灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちらちらと眼に映ずる雪な
 す膚白はだえかりき。

わが寝返ねがえる音に、ふとこなたを見返り、それと頷うなずく状さまにて、片手をふちにかけてつつ片足
 を立てて盥たらひのそとにいだせる時、颯さと音して、鳥からすよりは小さき鳥の真白ましろきがひらひらと舞
 ひおきて、うつくしき人の脛はぎのあたりをかすめつ。そのままおそれもなう翼を休めたる
 に、ざぶりと水をあびせぎま莞爾にっことあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣きぬもてその胸をば蔽おほ
 へり。鳥はおどろきてはたはたと飛去とびさりぬ。

夜の色は極めてくらし、蟬を取りたるうつくしき人の姿きやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして振向きざま、わがかほをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面だけだかく、眉あざやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり朧たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめ逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほゑみたまひて、

「お前あれは斑猫といつて大変な毒虫なの。もう可いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉様が見違へるのも無理はないのなもの。」

われもさあらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふままに頷きつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜着の肩、ながく柔かにおさへたまへり。

「ぢつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着いて、ね、気をしづめるのだよ、

可いかい。」

われはさからはで、ただ眼をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のしのしと道芝を踏む音して、つづれをまとうたる老
夫の、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。

「はい、これはお見さまがござらつせえたの、可愛いお見じや、お前様も嬉しかろ。はは
は、どりや、またいつものを頂きましょか。」

腰をななめにうつむきて、ひつたりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごつごつごつ
とたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれ甘いことかな。はい、参ります。」

と踵を返すを、こなたより呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答へて去る。山風颯とおろして、彼の白き鳥また翔ちおりつ。黒き盪のふちに乗
りて羽づくろひして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に雨戸を

ひきたまひき。

ここのこだま
九ツ餅

やがて添そいぶし臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故ゆえにや、わが膚はだをりをり慄りつぜん然たりしが何の心もなうひしと取とりすが継りまゐらせぬ。あとをあとをといふに、をさな物語ふた二ツ三ツ聞かせ給たまひつ。やがて、

「一ツ餅、坊や、二ツ餅といへるかい。」

「二ツ餅。」

「三ツ餅、四ツ餅といつて御覧。」

「四ツ餅。」

「五ツ餅。そのあとは。」

「六ツ餅。」

「さうさう七ツ餅。」

「八ツ餅。」

「九ツ餅——ここはね、九ツ餅といふ処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」
 背に手をかけ引寄せて、玉の如きその乳房をふくませたまひぬ。露に白き襟、肩のあたり鬢のおくれ毛はらはらとぞみだれたる、かかるさまは、わが姉上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ。乳の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉の乳房ただ淡雪の如く含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾のみぞあふれいでたる。

軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覚し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わななき取つくを抱きしめつつ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほその響のうちにものの叫びたる声せしが耳に残りて

ふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蔭絵まきえものの手箱てこばのなかより、一口ひとくちの
守まもり刀がたなを取出とりだしつづつ鞞さやながら引ひきそばめ、雄々おおおしき声こゑにて、

「何が来てももう恐くはない。安心してお寝よ。」とのたまふ、たのもしき状さまよと思ひて
ひたとその胸にわが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残ありあけ燈あけ暗とこぼく床しら柱しらの黒うつや
やかにひかるあたり薄うすき紫むらさの色籠いろこめて、香こうの薫かおり残りたり。枕まくらをはづして顔をあげつ。顔に
顔をもたせてゆるく閉とじたまひたる眼めの睫毛まつげかぞふるばかり、すやすやと寝入りてゐたまひ
ぬ。ものいはむとおもふ心おくれて、しばし瞻みまもりしが、淋さびしさにたへねばひそかにその唇
に指さきをふれて見ぬ。指はそれで唇には届かでない、あまりよくねむりたまへり。鼻を
やつまむ眼をやおさむとまたつくづくと打うちまもりぬ。ふとその鼻頭はなびきをねらひて手をふ
れしに空くうを捻ひねりて、うつくしき人は雛ひなの如く顔の筋すじひとつゆるみもせざりき。またその眼
のふちをおしたれど水晶すいせいのなかななるものの形を取らむとするやう、わが顔はその顔におくれげ
のはしに頬をなでらるるまで近ちかぢか々とありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざ
るに、はては心いれて、乳ちの下おもてに面おもてをふせて、強ひたく額たいもて圧おしたるに、顔にはただあたた
かき霞かすみのまとふとばかり、のどかにふはふはときはりしが、薄うす葉よう一重ひとえの支さふるなく着き

たる額ひたいはつと下に落ち沈むを、心こころづ着けば、うつくしき人の胸は、もとの如く傍かたわらにあをむきゐて、わが鼻は、いたづらにおのが膚はだにぬくまりたる、柔き蒲団やわらかふとんに埋うもれて、をかし。

渡船わたしぶね

夢ゆめまぼろし 幻まぼろしともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元のまま柔やわらかに力なげに蒲団ふとんのうへに垂れたまへり。

片手をば胸さやぬりにあてて、いと白くたをやかなる五指ごしをひらきて黄金おうごんの目貫めぬきキラキラとうつくしき鞆さやぬりの塗ぬりの輝きたる小さき守まもりがたな 刀たがをしかと持つともなく乳ちのあたりつるぎに落して据すゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼めのほほ笑む如き、髪かみのさらさらしたる、枕まくらにみだれかかりたる、それも違たがはぬに、胸むねに剣けんをさへきのせたまひたれば、亡なき母上ははのその時のさまに紛まがふべくも見えずなむ、コハこの君きみもみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除とりのけなむと、胸なるその守まもりがたな 刀たがに手をかけて、つと引く、せつぱゆるみて、青き光眼まなこを射いたるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐ちしおさとほとぼしりぬ。眼もくれたり。したしたとながれにじむをあなやと両こごしの拳こぶしもてしかとおさへたれど、留とどま

らで、たふたふと音するばかりぞ淋漓りんりとしてながれつたへる、血汐ちしおのくれなる衣きぬをそめつ。
うつくしき人は寂せきとして石像しずかの如く静しずかなる鳩尾みずおちのしたよりしてやがて半身をひたし尽つくしぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈ともにすかす指のなかの紅くれなひなるは、人の血の染そみたる色にはあらず、訝いぶかしく撫なで試こころむる掌たなのその血汐にはぬれもこそせね、こころづきて見定みまむれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すずしの絹ぬいをすきて見ゆるその膚はだにまとひたまひし紅くれなひの色なりける。いまはわれにもあらで声こゝろ高たかに、母上、母上と呼びたれど、叫こゝろびたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりしが、効かゝなくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝おほたりと覺し。顔あたたかに胸をおさるる心地こころに眼覚めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫おじの背せなに負はれて、とある山路やまじを行ゆくなりけり。うしろよりは彼のうつくしき人したがひ来ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送おりたまふならむと推おしはかるのみ、わが胸の中うちはすべて見すかすばかり知しりたまふやうなれば、わかれの惜おしきも、ことのいぶかしきも、取出とりいでていはむは益やくなし。教ふべきことならむには、彼方かなたより先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に帰るべきわが運うんならば、強とどひて止とどまらむと乞こひたりとて何かせん、さるべきいはれ
 あればこそ、と大人おとなしう、ものもいはでぞ行く。

断崖たんげの左右さゆうに聳そびえて、点滴てんてきする処ところありき。雑草ざつそう高たかき径けいありき。松まつ柏かしわのなかを
 行く処ところもありき。きき知らぬ鳥とりうたへり。褐色けつしきなる獸けものありて、をりをり叢くさむらに躍おどり入りたり。
 ふみわくる道みちにもあらざりしかど、去年こぞの落葉おちば道みちを埋うづみて、人多かよく通かよふ所ところとしも見えざ
 りき。

をぢは一いつ挺ちようの斧おのを腰こしにしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨いばらなど生おひ
 しげりて、衣きぬの袖そでをさへぎるにあへば、すかすかと切きつて払はひて、うつくしき人ひとを通とおし参ま
 らす。されば山路さんろのなやみなく、高たかき塗ぬり下げ駄たの見みえがくれに長ながき裾すそさばきながら来きたまひ
 つ。

かくて大沼おおぬまの岸きしに臨まみたり。水みづは漫まん々たんとして藍らんを湛たへ、まばゆき日ひのかげも此こ処この森もり
 にはささで、水面すいめんをわたる風寒ふうかんく、颯さつ々さつとして声こゑあり。をぢはここに來きてソとわれをお
 ろしつ。はしり寄よれば手てを取りて立たちながら肩かたを抱いだきたまふ、衣きぬの袖そで左右さゆうより長ながくわが肩かた
 にかかりぬ。

蘆間あしまの小舟おぶねの纜ともづなを解ときて、老夫おとしはわれをかかへて乗のせたり。一いつ緒しよならではと、しばし

むづかりたれど、めまひのすればとて乗りたまはず、さらばどのたまふはしに棹を立てぬ。船は出でつ。わつと泣きて立上りしがよろめきてしりゐに倒れぬ。舟といふものにははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後にゐたまへりとおもふ人の大なる環にまはりて前途なる汀にゐたまひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手なる汀に見えき。見る見る右手なる汀にまはりて、やがて旧のうしろに立ちたまひつ。箕の形したる大なる沼は、汀の蘆と、松の木と、建札と、その傍なるうつくしき人ともろともに緩き環を描いて廻転し、はじめは徐ろにまはりしが、あとあと急になり、疾くなりつ、くるくるくると次第にこまかくまはるまはる、わが顔と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処に松の木にすがりて見えたまへる、とばかりありて眼の前にうつくしき顔の臍たけたるが莞爾とあでやかに笑みたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶けて船より出だしつ。またその背を向けたり。

「泣くでねえ泣くでねえ。もうぢきに坊ツさまの家ぢや。」と慰めぬ。かなしきはそれにはあらねど、いふもかひなくてただ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうちかけらるるやう肩に負はれて、顔を垂れてぞともなはれし。見覚えある板たべいのあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫おじはわれを抱いだき下して、溝のふちに立たせ、ほくほく打うちゑみつゝ、慇懃いんぎんに会釈えしやくしたり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といひずてに何地いずちゆくらむ。別れはそれにも惜おしかりしが、あと追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくともなく歩ほをうつすに、頭かしらふらふらと足の重おもたくて行ゆき悩む、前まへに行くも、後ろうしろに帰るも皆見知越みしりこのものなれど、誰たれも取りあはむとはせで往ゆきつ来きたりつす。さるにてもなほものありげにわが顔をみつつ行くが、冷ひやかに嘲あざけるが如く憎にくさげなるぞ腹はら立たしき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向むき直なおりて、とほとほとまた山ある方かたにあるき出いしぬ。

けたたましき磴あしおと音ねして驚おどろき搦つかに襟えりを搦つかむものあり。あなやと振返ふりかえればわが家の後うしろ見みせる奈四郎なしろといへる力ちから逞たくましき叔父おじいの、凄すさまじき気色けしきして、

「つままれぬ、何処どこをほツつく。」と喚わめきぎま、引立ひつたてたり。また庭にわに引出ひきいだして水をや

あびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさへたる手をゆるせず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍ちて宙につるしながら、走りて家に帰りつ。立騒ぐ召つか
ひどもを叱りつも細引を持って来さして、しかと両手をゆはへあへず奥まりたる三畳の暗
き一室に引立てゆきてそのまま柱に縛めたり。近く寄れ、喰さきなむと思ふのみ、齒がみ
して睨まへたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆つりたる眦は憑きもののわざよとて、寄
りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方さぎめきて、何処にか行きをれる姉上帰りましつと覚し、襖いくつかばたば
たと音してハヤここに来たまひつ。叔父は室の外にさへぎり迎へて、

「ま、やつと取返したが、縄を解いてはならんぞ。もう眼が血走つてゐて、すぎがある
と駈け出すぢや。魔どのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、しかり、隙だにあらむにはいかでかここ
にとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまろび入りて、ひしと取着きたまひぬ。ものはいはで
さめざめとぞ泣きたまへる、おん情手にこもりて抱かれたるわが胸絞らるるやうなりき。

姉上の膝に臥したるあひだに、醫師来りてわが脈をうかがひなどしつ。叔父は醫師とともあなたに彼方に去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様はどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつくづくちつとわが顔を見まもりたまふ、涙痕したたるばかりなり。

その心の安んずるやう、強ひて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄気味が悪いねえ。」

と傍かたわらにありたる奈四郎なしろの妻なる人つぶや呟つぶやきて身ぶるひしき。

やがてまた人々われを取巻とりまきてありしことども責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑うたがを解いかむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問ねどひ、葉問はどひするにいちいちときあ々説明かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつつ心に何をかいひたる。

やうやくいませしめはゆるされたれど、なほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑うたがを増すをいかにせむ。ひしと取籠とりこめて庭にも出いきで日を過しぬ。血色わるくなりて瘦やせもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見うしろみの叔父夫婦にはいとせめて秘かくしつ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色見せたまひしに、門か

辺とべにありたる多くの児こども我が姿を見ると、一いつ齊せいに、アレさらはれものの、氣きち狂がいの、狐きつつきを見よやといふいふ、砂利じやり、小砂利こじやりをつかみて投げつくるは不ふ断だん親しんしかりし朋とも達だちなり。

姉上せじょうは袖そでもてわれを庇かばひながら顔を赤あかうして遁にげ入りたまひつ。人目ひとめなき処ところにわれを引ひ据き多すつと見るまに取とつて伏ふせて、打うちたまひぬ。

悲かなしくなりて泣なきだせしに、あわただしく背せなをばさすりて、

「堪かん忍にんしておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」

といひかけて、

「私わたしあもう氣きでも違ちがひたいよ。」としみじみと搔かき口くち説せきたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何なにとてさはあやまるや、世よにただ一人ひとりなつかしき姉上せじょうまでわが顔かほを見るごとに、氣きを確たしかに、心こころを鎮しずめよ、と涙なみだながらいはるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂くるひしにはあらずやとわれとわが身を危あやぶむやうそのたびになりまさりて、果はてはまことにものくるはしくもなりもてゆるくなる。

たとへば怪あやしき糸いとの十重とえ二十重はたえにわが身をまどふ心地こころちしつ。しだいしだいに暗くらきなかに奥おく深くおちいりてゆく思おもひあり。それをば刈かり払はらひ、遁のがれ出いでむとするにその術すべなく、する

こと、なすこと、人見て必ず、眉を顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなどするにぞ、氣あがり、心激し、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまま身の周囲はことごとく敵ぞと思わるる。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何らのものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見てその弟を忘れしことあり。塵一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化したるにて、恐

きあやしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。さればぞ姉がわが快復を祈言もわれに心を狂はすやう、わざとさはいふならむと、一たびおもひては堪ふべからず、力あらば恣にともかくもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔むしらむ、透あらばとびいでて、九ツ筈とをしへたる、たうときうつくしきかのひとの許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、ふたたび暗室にいましめられぬ。

せんじゆだらに
千呪陀羅尼

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとし

いへば、たけりくるひ、罵り叫びてあれたりしが、つひには声も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつら昇きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、赤土の色きれいに掃きたる一条の道長き、右左、石燈籠と石榴の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはるがはる続きたるを行きて、香の薫しみつきたる太き円柱の際に寺の本堂に据ゑられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破る響きこえて、僧ども五三人一斉に声を揃へ、高らかに誦する声耳を聳するばかり喧ましき堪ふべからず、禿顛ならびる木のはしの法師ばら、何をかすると、拳をあげて一人の天窗をうたむとせしに、一幅の青き光颯と窓を射て、水晶の念珠瞳をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞まる時、若僧円柱をいざり出でつつ、ついゐて、サラサラと金襴の帳を絞る、燦爛たる御廚子のなかに尊き像こそ拜まれたれ。一段高まる経の声、トタンにはたたがみ天地に鳴りぬ。

端巖微妙のおんかほぼせ、雲の袖霞の袴ちらちらと瓔珞をかけたまひたる、玉なす胸に纖手を添へて、ひたと、をさなごを抱きたまへるが、仰ぐ仰ぐ瞳うごきて、ほゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかかりて、姉上は念じたまへり。

滝やこの堂にかかるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦いて寄する風の音、遠き方より

呻り来て、どつと満山に打あたる。

本堂 青光して、はたたがみ堂の空をまろびゆくに、たまぎりつつ、今は姉上を頼ま
 ずは、あなやと膝にはひあがりて、ひしとその胸を抱きたれば、かかるものをふりすて
 むとはしたまはで、あたたかき腕はわが背にて組合はされたり。さるにや気も心もよわよ
 わとなりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのかなに陀羅尼
 を呪する聖の声々さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くもの凄きに、身の置処
 あらずなりぬ。からだひとつ消えよかすと両手を肩に縋りながら顔もてその胸を押しわけ
 たれば、襟をば掻きひらきたまひつつ、乳の下にわがつむり押し入れて、両袖を打かさ
 ねて深くわが背を蔽ひ給へり。御仏のそのをさなごを抱きたまへるもかくこそと嬉しき
 に、おちゐて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪もはてたる。雷
 の音も遠ざかる。わが背をしかと抱きたまへる姉上の腕もゆるみたれば、ソとその懐より
 顔をいだしてこはごはその顔をば見上げつ。うつくしきはそれにもかはらでなむ、いたく
 もやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外をうかがふことだにならざる、静まるを待
 てば夜もすがら暴通しつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜したまひぬ。その一夜の
 風雨にて、くるま山の山中、俗に九ツ筈といひたる谷、あけがたに杣のみいだしたるが、

忽ち淵になりぬといふ。

里の者、町の人皆挙りて見にゆく。日を経てわれも姉上とともに来り見き。その日一天うららかに空の色も水の色も青く澄みて、軟風おもむろに小波わたる淵の上には、塵一葉の浮べるあらで、白き鳥の翼広きがゆたかに藍碧なる水面を横ぎりて舞へり。

すさまじき暴風雨なりしかな。この谷もと薬研の如き形したりきとぞ。

幾株となき松 柏の根こそぎになりて谷間に吹倒されしに山腹の土落ちたまりて、

底をながるる谷川をせきとめたる、おのづからなる堤防をなして、凄まじき水をば湛へつ。一たびこのところ決潰せむか、城の端の町は水底の都となるべしと、人々の恐れまどひて、怠らず土を装り石を伏せて堅き堤防を築きしが、あたかも今の関屋少将の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩なりし常磐木もハヤ丈のびつ。草生ひ、苔むして、いにしへよりかかりけむと思ひ紛ふばかりなり。

あはれ礫を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血気なる友のいたづらを叱り留めつ。年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて肅然とせり。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年11月

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月30日公開

2005年12月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜潭譚

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>